

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520479

研究課題名(和文) 有無・量的大小・増減・出現消滅の述語の総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study of predicates denoting existence/nonexistence, large/small values on quantitative scales, increment/decrement, and appearance/disappearance

研究代表者

服部 匡 (Hattori, Tadasu)

同志社女子大学・その他部局等・教授

研究者番号：40228490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本計画は、大規模コーパス(新聞記事・国会会議録など)における共起用例の統計的調査に立脚する。量的大小を表す形容詞述語と量的名詞との共起関係とその通時的推移、量的形容詞反義対における名詞類との共起傾向の比較、有無と大小の述語の意味的・統語的性質の関係、増減の述語と大小の述語との関係などについて、統計的データに基づき、主として意味論的観点からの考察を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project is based on a statistical survey of co-occurrence data from large-scale corpora. I examined the following themes from the semantic point of view: 1) analysis of the synchronic and diachronic facts concerning the collocation of nouns and quantificational adjectives, 2) analysis of antonymy among quantificational adjectives, 3) analysis of relations between quantificational adjectives and verbs of increment/decrement, and 4) analysis of relations between quantificational adjectives and predicates of existence/nonexistence.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：コーパス 共起関係 増減 量 程度 名詞

### 1. 研究開始当初の背景

量的な側面を持つ名詞類と、その値の大小を表す述語として用いられる基本的形容詞類との共起関係については、国広(1982)、秋元(1999)などの先行研究がある。

そこでは、共起形容詞が名詞によって異なること(密度-高い/濃い、傾向-強い、など)、同一名詞に対しても複数の形容詞が共起する場合があること(例:「可能性が 大きい/高い/強い/濃い/多い」)、などが指摘されていた。しかし、上述の性質を持つ名詞類・形容詞類の組を包括的に記述した研究がなく、また、量的形容詞と密接な関係を持つ増減の動詞(例:「高まる、上がる、強まる、増す」)などについて、同様な観点から量的な名詞との関係を問題にした研究がなかった。さらに、先行研究はいずれも共時的観点にのみ立つもので、通時変化を扱うものはほとんど見られない。

当然ながら、関連する諸現象を総合的に捉え説明を与えることは行われていなかった。

### 2. 研究の目的

量的大小を表す述語、増減の述語、有無の述語、出現消滅の述語について、その名詞との共起関係の特徴、とりわけ量的な名詞との共起の上での特徴を大規模コーパスでの用例に基づき数量的に分析する。

諸名詞類が、有無・多寡・出現消滅の述語のうちどれとよく共起するか、また、それぞれの種類の述語の中で「大」方向(有・多・出現)と「小」方向(無・少・消滅)のどちらの述語とよく共起するかのパターンを分析する。さらに、同類の述語(例:高い/大きい/強い/濃い/多い)のうちどれと特によく共起するかを明らかにする。

また、一般的な名詞句を主語とする場合の有無(存在/不存在)の述語と多寡の述語の平行性に特に注目し、コーパスの用例から得られる事実を参照して、それらを有する文に関する包括的な説明枠組みを提案する。

以上を踏まえ、当該述語類と名詞類のそれぞれを総合的な観点から特徴付け、諸事実に対する説明を与える。

### 3. 研究の方法

大規模コーパス(新聞記事データベース、自作Webコーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパスなど)における共起用例データの抽出とその統計的分析による事実の探索・発見に研究の基盤を置く。

一方で、名詞や形容詞・動詞の意味に関する理論的・記述的研究を幅広く参照し、統計的分析によって知られた諸発見に対して、できる限り一般性のある意味論的・統語論的観点からの説明を与えることを目指す。

### 4. 研究成果

#### (1) 量的名詞の通時的・共時的研究

何らかの意味で量的(程度的)に捉えうる名詞一般(168語)に関して、国会会議録を用いて、「大きい」「強い」「高い」「濃い」などの形容詞別共起傾向の推移を分析し、次のような変化傾向の存在を発見した。

① 「高い」「大きい」「強い」のいずれかとの共起率が上昇している名詞が多い。各形容詞について、それとの共起率の上昇した名詞・一貫して共起率の高い名詞を眺めると、意味的な共通点のある語群が認められる。大局的に見れば、元々は共起形容詞の顔ぶれに関して多種多様であった諸名詞が意味的な類似性を軸として、主に単一の形容詞と共起する方向にまとめられていく変化とみなしうる。

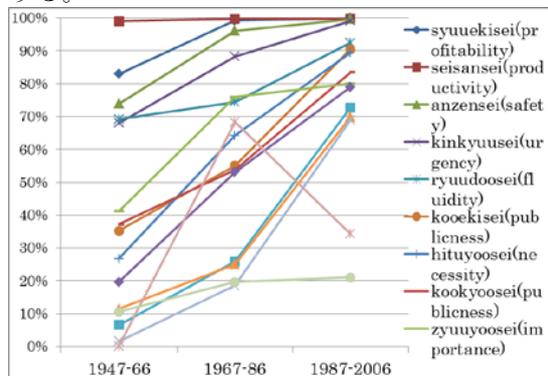


図1 「～性」での「高い」の共起率推移

② 多くの名詞に対して共起率が顕著に減少した形容詞は「多い」である。これは、大局的には、一種の意味変化と考える余地がある。つまり、抽象的な量の大きさを表わす用法を縮小する方向への変化である。

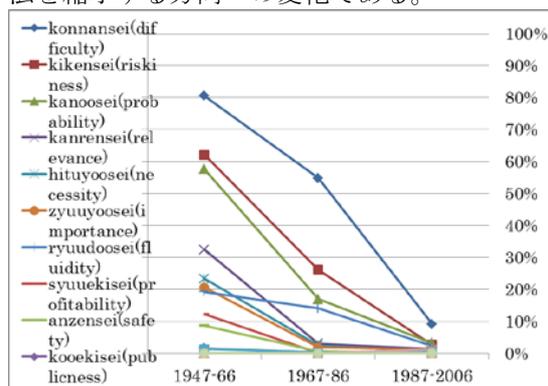


図2 「～性」での「多い」の共起率推移

③ ①②ともに、対応する小値語(「低い」「小さい」「弱い」「多い」)での変化は、より遅いか、不明瞭である。

また、同じ現象を共起頻度(共起率ではなく)の観点から見た場合も、特に、「高い」との共起頻度が上昇した語、「多い」の共起頻





〔学会発表〕（計 4 件）

- ① From Quantity to Height: Diachronic Change in the Preferences of Basic Scalar Adjectives for Nouns Denoting a Gradable Property in Japanese、The 21st International Conference on Historical Linguistics、University of Oslo、2013
- ② コーパスに基づく日英対照通時研究の可能性、「コーパス日本語学の創成」研究発表会、国立国語研究所、2013
- ③ 極性反義語の用例分布とその解釈、第2回コーパス日本語学ワークショップ、国立国語研究所、2012
- ④ 程度的な名詞と尺度形容詞類の共起傾向の推移、第1回コーパス日本語学ワークショップ、国立国語研究所、2012

〔その他〕

同志社女子大学研究者データベース  
[http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/1906/1906\\_Researcher.html](http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/1906/1906_Researcher.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

服部 匡 (HATTORI, Tadasu)  
同志社女子大学・表象文化学部・教授  
研究者番号：40228490

